
女性死神協会@運動会提案編

市丸乱菊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女性死神協会@運動会提案編

【Nコード】

N7788H

【作者名】

市丸乱菊

【あらすじ】

カラブリでもお馴染みの、女性死神協会から運動会の提案が・・・
そして各隊の内容は・・・？

ここは女性死神協会会議室。

朽木家の中にある秘密部屋でございます。

そして今日も、副会長の伊勢七緒八番副隊長がメガネに手をあて、今後の予定を話しています。

「えー。現世には、運動会というものがあるらしいのです。そしてそれを尸魂界でもやろうかと思うのですが……」

「ウンドーカイ？」

女性死神たちは何かわからない。

「はいはいっ！！あつあたし知ってるー！！」

元気よく手を挙げる松本さん。

「……乱菊さんは現世に行き過ぎなんですよ……
つたく……出番多すぎなんです……」

伊勢さんは呆れ顔。

「なんか競い合いするんだよねー」

「そうです。いろんな競技をチームで競い合い、汗を流し交流を深

め会っ。

そっいつとこですかね……」

「なるほどー。」

他の女性隊員たちは納得した。

「キョーギって何？」

やちるはキョトンとしていた。

「戦いで勝つお遊びよ」

松本がそつと教えた。

「剣ちゃん喜びそう」

やちるはにこつと笑った。

「そこでっ、我ら護艇一三隊もいろんな競技を考えてそれを実施しようと思っので。」

各隊で案をよろしくお願いします。以上！解散っ！！」

その場から女性隊員たちが消えた。

（一番隊）

伊勢とやちるが向かっていた。

「山本総隊殿のお知恵を拝借させていただけたら幸いです。」

「ねー今日はお菓子は？」

伊勢は一番隊隊長山本総隊長に声をかけた。

「運動会かのう……わしも昔なら……
そうじゃのう……ほれっ金平糖じゃ……

・

わしの肩を誰が一番つまくほぐす事ができるか？という競技はど
うじゃろう！」

「わーい。ありがとう」

そしてやちるが帰っていった。

「却下です。一番隊不参加で。」

「いつ伊勢副隊長……」

「何か？」

メガネに手を添え、総隊長を睨んだ。

「何もありません……………」

「はいっ撤収」

パンパンパンっと手をたたいた。

「最近の女子はみんなあんなのかのう……………」

総隊長は深いため息をついた……………」

一番隊……………不参加

（二番隊）

「競技か・・・そうだなあ・・・」

碎蜂隊長が考えてる横で、お菓子を食べながら大前田が碎蜂のレポートを見て口を出した。

「ふむふむ。運動会の競技ですか・・・」

私が・・・いや、私たちが、猫になった夜一樣を捕まえて・・・ぽつ。
想像して顔を赤らめる碎蜂。

「夜一樣を捕まえた人が勝ちなんてベタな競技はやめてくださいね。」

鼻をほじりながら大前田が言った。

「!!!!!!!!!!!!!!」

あまりにも凶星なので、いつもの癖で手が出てしまった。

「死にたいのか？」

大前田の首に雀蜂をつきつけた。

「そつその案で行きましょう!!!」

二番隊……猫（夜一）を捕まえたのが早い人が勝ち競技。

（三番隊）

松本が吉良に説明していた。

「競技……ですか……?」

「そつなのよお。吉良もちゃんと考えてね」

「そつですねえ……」

白い狐のおまんじゅうを上からぶら下げて口で取って走る……
なんてどうですか……

どうせ僕人気ないですし……」

辺りがドヨーーーーンとした。

「あんたいつまでギンネタ好きよね……」

三番隊……狐饅頭食い競争

(四番隊)

「……………」ということで、卯の花隊長、何かいい案ありますか？」

そう聞くのは虎徹副隊長である。

「そうですね……」

四番隊特製滋養強壮スープの早飲み対決。

それで決まりですね。」

ニコニコする卯の花隊長。

「はい……………」

虎徹はうなずくしかなかった。

四番隊……四番隊特製滋養強壮スープ早飲み対決＋（おまけ）山田
第七席の薬型チヨコ

（五番隊）

松本と伊勢が向かっていた。

「……………というわけで、雛森。案があればいいんだけど、
無理しなくてもいいからね。
体はもう大丈夫なの？」

松本が心配そうに聞く。

「はい……………。
大丈夫です……………。」

競技についてですかぁ……………

そうですね……………

この硬いメガネクツキーを割った多く割った人が勝ち…………とか……………」

松本も伊勢も真っ青になった。

「割った人が……………勝……………ハハハ……………」

フラフラ／＼バタンっ。

「ちよっ！！雛森っ！！！！！」

お約束で倒れました。

「乱菊さんっ！やっぱりこうなったじゃないですかっ！！！」

「知らないわよぉ！自分で隊長ネタ出してきたじゃない！」

五番隊……………メガネクツキーを割った人が勝ちレース???

（六番隊）

「またそんな面倒なことを……………」

伊勢からの伝言を受けた恋次が頭を悩ませた。

「こんなことしたらまたあの人が、あのキャラクターを持ってくるんじゃない？」

「恋次。悩んでるようだな……………」

「たつ……隊長！びっくりさせないでくださいよ！」

「ここに私が考えた案がある。好きにするがいい。」

そう言って白い紙を1枚恋次に渡して去っていった。

「なんだこれ……………」

そこには、白哉の考えたオリジナルキャラのわかめ大使が描かれており、その下に、

「この格好に扮して走る競技」

と書かれている。

[illegible]

一瞬言葉が思い浮かばない恋次。

「まっまじっすか——!?!?!?!?!?」

次に出た言葉は無意識に叫んでいた。

遠くでそれを耳にした白哉。

「フッ」

と、にやつと笑つた。

六番隊……わかめ大使のコスプレリレー

(七番隊)

射場副隊長と狛村隊長が向き合っていた。

「運動会とやらか……」

現世では色々やってるようだな……」

「はい。」

「鉄左衛門はどんなのがいいと思うのだ？ わしは現世に行ったことないのでな……」

「た……隊長っ！（またまた微妙にそのこと気にしとんじやろが……）」

「ふむう……。この前これを9番隊の檜佐木から現世のお土産だともらったのだが……」

そういつて、袖から丸い平べったい物を出した。

「なんですか？ それは……」

「これはフリスビーといつてな……」

そういつて立ち上がり、隊舎裏へ向かった。

「五郎！」

そうして自分の愛犬と違う方向に向かって、ビューンと飛ばした。

反射的にそれに食らいつく五郎。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

射場絶句。

「こんなのはどうかろう？隊長が投げたフリスビーを副官がひらつてくるのだ。」

お。

そうだ、このフリスビーにお前のワンイラストをいれてくれないか……」

「よ・・・・・・・・・・喜んで・・・・・・・・」

（まじでこの提案出すんじゃるか・・・・・・・・）

七番隊……フリスビー競技@隊長が投げて副官が取ってくる。

（八番隊）

「なっなーおちゃー……ん」

何してるの？」

享楽隊長が伊勢デスクを覗き込む。

「隊長には関係ありません。」

「ふむふむ。運動会か……」

「隊長に頼むとろくな事にならないので、やめてくださいね。」

「僕が考えてあげるよ」

「じゃあたとえばどんなのですか？」

「えつとね！。」

僕が隠れるでしょ？

そして死神の女の子全員が僕を探すの」

そして見つけた女の子が僕を自由に……ムフフ」

幸せそうな顔から一転。
真っ青になる享楽。

「楽しそうですね。」

今までにないすごい視線……。

「ではこうしましょう。男性死神の方々に享楽隊長を探して頂きましょう。」

「えっ?! ななおちゃん。やめてっ!! ななおちゃん……。」

泣きながらガクリと肩を落とした。

八番隊…… 享楽隊長のかくれんぼ@男性のみ

(9 番隊)

「ふむふむ……。運動会か……。最近編集の仕事で忙しいからなあ……。」

檜佐木が編集の仕事をしながらブツブツ言った。

「ふーん。忙しいんだあ？」

突然現れた想い人、松本が現れたのでびっくりした。

隣には伊勢。

「らっ……。！乱菊さん！！！」

「ちゃんと考えないと……。……。」

「はいっ！」

「もう原稿書かないからね」

松本は嬉しそうだ。

「ええっ！？！？！それムリムリ！！！！困りますよお……。……。」

檜佐木は焦った。

「運動会の競技ねえ．．．．．借り物競争なんかどうですかねえ？」

（好きな人．．とか書いてあつて、乱菊さんと手をつないだり．．．

そして．．．．．「ねえしゅうへーなんて書いてあつたの？」
「好きな人です！！」

「しゅうへー．．．．．あたしもス・キ♪」なんてこ
とに．．．．．）

あごに手を当て、普通に答えた。少しにやけてしまいそうになった
が、はっとして本人の目の前、自粛した。

「．．．．．」

伊勢と松本は顔を見合わせる。

「やっぱり個性がないわね．．．．．」

「そうですね。確かに個性に欠けますね．．．．．」

「！！！！！！！！！！」

だからっ！！

俺の個性って何???」

檜佐木は再起不能になった。

九番隊……借り物競争(いたって普通。

(十番隊)

「さてつとつちは……」

あっ！

たいちよーーーーっ♪」

松本が日番谷をみつけ、手を振る。

「まーつもとーーーーーっ!!!!!!」　　「たくお前は……………」

松本をみつけるや否やおしかりの一言。

「だつてー…………女性死神協会の仕事があ……………」

……………んですね♪

十番隊も運動会に参加するんで出し物を決定しないといけないんですよーw」

しゅんとしてたと思いきや、いやはやいつもの松本さん……………」

「つたく……………」

んで？運動会の出し物？

……………」

お前が勝手に決めとけ…………ガキクセー……………」

くるつと後ろを向いて歩き始めた。

「んじゃ……………」

たいちよーの特技を生かして……………」

「!!!まさか…………また力キ氷とか言うんじゃないだろうな……………」

「

日番谷は後ろを振り返る。

「えー。そんなわけないじゃないですかー……」

えーっとですねぇ……

氷輪丸に凍らされた隊員をどの隊が一番先に助けられるか競うなんてどうですかぁ？」

ペンを唇に押し当てた松本が上を見ながら言った。

「……………」

日番谷が青ざめる。

「それは死人が出るんじゃないか……………」

「そーですかねえ……………」

んじゃ顔は出したままで凍らせてくださいね」

「おう。そうか……………」

それなら……………」

ん……………????

ちょ……………ちょっとまで松本っ！！！！！」

十番隊……氷漬けの隊員救出大作戦

（十一番隊）

「けーーーーんちゃーーーーん♪」

「おう。やちる。どうした？」

やちるが更木の肩に飛び乗った。

「今度ねー、ウンドーカイがあるんだってー。」

それでね、出し物決めないといけないんだって」

更木の周りには隊員たちがいる。

「またそんな企画を……」

綾瀬川と斑目がボソボソと話した。

「隊長のことだから、どうせ死ぬまで戦って生き残った奴が勝ちだ
!!!!

とか言っんじゃないか……?」

「そうだなあ……」

戦いあいだと???

死ぬまで戦って最後に生き残った奴が優勝だっ!!!!」

「やっぱりそうなった……」

隊員たちは呆れた視線を向けた……。

十一番隊……バトルロワイヤル（死ぬまで

(一二番隊)

「ホホウ……なるほど。
それで私に意見を求めているのだネ。」

マユリはしばし考えていた。

「はい。マユリ様。」

「そうだねえ。」

私が作ったコースを進んで行って、生き残った人が勝ち。
というのはどうだろう？」

「完璧です。マユリ様」

顔色ひとつかえず、メモを取るネム。

「あんなコースやこんなコース……。」

フフフ。

「楽しみだねえ。」

マユリは想像しながらニヤニヤ笑った。

12番隊……生き残りサバイバルゲーム？

(13番隊)

「……というわけですねー。浮竹隊長。出し物を1つ考えてみて下さい。」

そう言ったのは四番隊副隊長虎徹勇音の妹、虎鉄清音。そしてその隣には、小椿仙太郎。

「運動会の出し物か……………」

そうだなあ…………。

誰が友達を多く作れるかを競うゲームなんていうのはどうだい？

「w」

人差し指をたて、嬉しそうな浮竹隊長。

「いいですねそれっ」浮竹隊長らしくてw」

「いいっすねー」浮竹隊長らしくてw」

第三席の二人はシンクロしている。とても嬉しそうだ。

十三番隊……トモダチづくり？

（女性死神協会会議室）@朽木家

「では、各隊のレポートを集めますー。」

「はい。」

パンパンと手を叩いて伊勢さんがレポートを集める。

「どう？うちの隊のなんかおもしろそうでしょう？w w w w w」

嬉しそうな松本さん。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

すると突然、隠し扉が開いた。

「!!!!!!!!!!」

振り返ると・・・・・・・・

「一番隊のレポートを忘れておるぞっ!!!!!!!!!!」

総隊長殿。

「却下です。帰って下さいってば!!!」

総隊長殿を睨む伊勢。

さすがにこれには女性死神協会のみんなも哑然。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

はい・・・・・・・・。」

総隊長殿はシヨボンとして帰っていきました。

「最近の女子はこんなもんなのかう・・・・・・・・。」

昔はよかったなあ・・・・・・・・

ワシもキャーキャーいわれておったのに・・・・・・・・。はあ・・・・・・・・

「

ブツブツ言いながら去っていきました。

「では、仕切りなおして・・・

各隊の案を・・・・・・・・。」

レポートを見ながら動きが止まった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あまりのひどさに声も出ない伊勢さんでした。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7788h/>

女性死神協会@運動会提案編

2010年10月9日17時25分発行